

【解説】DNAに『地域ビジネスの二重らせん構造』を持つ人たち

内浦有美

私が独立して、キャリア教育の研究員をはじめてまだ間もない、二七歳の時のこと。あの人からひよいと、凶鑑のような写真集『いろどり おばあちゃんたちの葉っぱビジネス』（立木写真館出版/A四判二〇八頁オールカラー）を手渡されました。

「きつと、興味があると思うよ」

当時、まだ「上勝町」の存在も、「葉っぱビジネス」が何たるかも知らなかった私にとって、開いたページに映っていたおばあちゃんおじいちゃんたちの溢れんばかりの笑顔は、強烈パンチでした。四季折々の里山の景色、そのなかで色とりどりの美しい葉っぱを摘む人々、写真からでも圧倒的に伝わってくる彼らの生きるエネルギー、幸福感…。

同じ日本で、この地域では何が起きているのだ？

その数か月後、私はバッグ片手に上勝町を訪れていました。この目で、どうしても、上勝町で何が起きているかを見てみたかったです。そしてそこから、六年半の長い期間にわたって、上勝町に住みながら、横石さんや上勝町の農家さんたち、役場や企業のみなさんとお仕事を一緒にさせてもらうことになりました。人生とは不思議なものです。

上勝に拠点を移して一年が過ぎたころ、以前から興味があったモクモク手づくりファア

ムへ視察に行こうと思ひ立ちました。そして、視察申し込み用紙の備考欄に「上勝町で地域IUJターンに興味ある若者を対象にした人材育成の研修を企画・担当しています。御社の採用理念や人材育成方針に興味があります」というような内容を書き添えました。

視察当日。受付で名前を告げると事務所内に通され、少し時間をおいて視察担当と思われる方が来られました。モクモクは若い社員さんが多いイメージだけど、この方はかなり年が上の方だなあ。あ、でも、にこにこ笑顔がやさしくて素敵…。

「木村です。今日は何を聞きたくて？」

なんとつ、木村社長！ 恐縮して質問もできず縮こまっていたら、パーテーションの向こうから「そんなPOPで商品の思いが伝わるのか！」と怒声。隙間から見えた顔は、吉田専務その人。『仏の木村、鬼の吉田』を生で見られた興奮に、言葉がでませんでした。木村さんが対応してくださったのは、もちろん、上勝町や横石さんへのご配慮があったからに違いありません。でもきつと、この方は純粹に、若い人や意欲ある人がお好きなんじゃないかな、そう伝わってくるお人柄に一瞬で惹かれました。

「どうしても、横石さん木村さんお二人と、一緒に仕事をしたい」という思いは、幸運なことに、それからすぐに実現しました。各地域でのIUJターンや起業・就農を目指す全国の若者たちを支援する研修事業で、株式会社いろいろりが主体となり、モクモク手づく

りファーム、株式会社四万十ドラマ（高知県・四万十川流域）、NPO法人素材広場（福島県・会津地域）の四地域・四団体が連携、私は事業全体の企画・コーディネートを担当しました（内閣府「地域社会創造事業」平成二二年度～二三年度の二年間実施）。

上勝町で（後に四地域で連携して）研修を行うにあたって、私は地域ビジネスの成功に必要な要素として「地域ビジネスの二重らせん構造」という仮説を提唱し、研修の中心（テーマ）に据えました。「二重らせん説」とは、『地域ビジネスに必要な〃システム（仕組み）』と『地域をまわす〃気』の二つが、DNA構造のらせん階段のように、複雑に、けれど整然と並び絡み合うことで、その地域全体や地域ビジネスが上手くまわっていく、というものです。

『システム』も『気』も、両方がしっかりと個々に確立していて、なおかつ絶妙に交じり合うことで、相乗効果を生みだします。どちらが弱くても強くても駄目で、その二重らせんをその身体に内包しているのが、日本を代表する地域再生人であり経営者であるお二人ではないか、そう確信しています。本シンポジウム・報告書を通して、その一端でもみなさんに感じていただけたら幸いです。

どんな地域にも、どんな組織にも、課題を抱えて日々苦悩・格闘されている人々がいます。そうしたみなさんの一助とならんことを、心より願って。